天の鶴群
――遣唐使の母が贈る歌――

平舘英子

一　はじめに

天平五年癸酉、遣唐使舶発二難波一入レ海之時、親母贈レ子歌一首并短歌

秋萩を　妻問ふ鹿こそ　一人子に　子持てりといへ　鹿子じもの　我が一人子の　草枕　たびにし行けば　竹玉を　しじに貫き垂れ　斎瓮に　木綿取り垂でて　斎ひつつ　我が思ふ我が子ま幸くありこそ

反歌

たび人の　宿りせむ野に　霜降らば　我が子はぐくめ　天の鶴群

（巻九・一七九一）

右は、遣唐使として中国に渡り、その地を旅する我が子の無事を祈る母の歌とされる。作者は不詳である。

日本における遣唐使の派遣は実質十五回とされるが、『萬葉集』の採歌範囲の対象となったのは第一次から第十次で、実際に歌が残るのは、第七次（七〇二年出発）・第八次（七一七年出発）、第十次（七三三年出発）の作である。遣唐使に関する作品は使人自身の歌は僅か四首で、他の二十数首はすべて見送る側の人々の作である。[2]それらの作品が航海の安全を関心事とする発想の型を持つ事を梶川信行氏は指摘される。[3]遣唐使の発遣に関しては、『続日本紀』及び『延喜式』の記事から、大使や副使その他使人の任命、賜節刀、奉幣、祭祀などの儀礼が考えられるが、航海の安全への祈願である奉幣は、『延喜式』（巻第八祝詞条）によれば「遣唐使時奉幣」の祝詞が見え、平城京においては春日山下に於いて天心地祇を拝したらしい。[4]また祭祀は住吉神へのそれが「天平五年、贈二入唐使一歌一首」に「住吉の　我が大御神　船の舳に　うしはきいまし　船艫に　み立たしまして　さし寄らむ　磯の崎々　漕ぎ泊てむ　泊まり泊まりに　荒き風　波にあはせず　平けく　率て帰りませ　もとの朝廷に」（巻十九・四二四五）とあって、当該歌と同じ遣唐使へのそれとして見える。当該歌についても住吉神との明証はないが、「竹玉を」の「斎ひ」に同神が祀られていた可能性を示唆する説もある。[5]しかし、住吉神を直接示す表現は無く、航海に関する内容は欠如している如くである。第十次の作には他に遣唐使として中国での体験を持つ山上憶良の贈った「好去好来歌」（巻五・八九四～八九六）を始め、笠金村の「贈二入唐使一歌」（巻八・一四五三～一四五五）もある。「好去好来歌」は「神代より　言ひ伝て来らく　そらみつ　大和の国は…

高光る　日の大御門　神ながら　めでの盛りに　天の下　奏したまひし　…諸々の　大御神たち　船の舳に　導きまをし　天地の　大御神たち　大和の　大国御魂　ひさかたの　天のみ空ゆ　天翔り見渡したまひ　事終はり　帰らむ日には　また更に　大御神たち船の舳に　み手うち掛け　…大伴の　三津の浜辺に　直泊てに　み船は泊てむ　障みなく　幸くいまして　はや帰りませ」（巻五・八九四）と詠み、笠金村歌も「…大君の　命怖み　夕されば　鶴が妻呼ぶ　難波潟　三津の崎より　大船に　ま梶しじ貫き　白波の高き荒海を　島伝ひ　い別れ行かば　留まれる　我は幣引き　斎ひつつ　君をば遣らむ　はや帰りませ」（巻八・一四五三）と詠む。いずれも大君の命を受けての出発に航路の安全と無事の帰国を願う内容であって、中国国内の旅路を案ずる表現は見られず、当該歌の特異さが目立つ。そうした当該歌の特異性について梶川氏は「本来遣唐使とはまったく関係のない」「旅行く子を心配する親の心情をうたった古歌などを転用したもの[6]」と考えられている。一方、鈴木利一氏は「秋萩を妻問う鹿」を、「むしろ遣唐使一行とその家族全体の側に寄った表現」と解して、遣唐使の進発の折りの作を大伴氏の一人が記録したとされている。当該歌において、題詞と天平五年の遣唐使の発遣とには齟齬が無く、『萬葉集』は当該歌を遣唐使の母の歌として記載している。そうあることを考えてみたい。

二　遣唐使の旅

第十次遣唐使は天平四年八月丁亥（十七日）に遣唐大使従四位上多治比真人広成、副使従五位下中臣朝臣名代、判官四人、録事四人が任命され、同九月には舶四艘を造らせ、翌天平五年閏三月癸巳（二十六日）遣唐大使多治比真人広成は辞見し、節刀を授けられて、夏四月三日に、難波津より進発している。記録の上では進発の前年の秋から準備が始まっている。期間はほぼ八ヶ月である。以上は『続日本紀』の伝える記事に基づくが、中国側の資料では「（開元）二十一年（七三三）八月日本国朝賀使真人広成与二傔従五百九十人一[8]舟行遇二風飄一至二蘇州一刺史銭惟正以聞レ詔。通事舎人韋景先往二蘇州一宣慰レ勞焉」（冊府元亀　一七〇　帝王部来遠）とあり、翌開元二十二年（七三四）には「四月日本国遣使来朝、献二美濃絁百匹水織絁二百疋一」（冊府元亀　九七一　外臣部朝貢）とある。

遣唐使の航路は古くは壱岐・対馬海峡を通って、朝鮮南部に着き、朝鮮半島の西の海岸に沿って渡航して、中国の三島半島から入国する北路であったが、六百六十年、新羅によって百済が滅亡し、新羅との関係が悪化したために利用できなくなり、七世紀の末から八世紀の半ばまでは南島路に変わった。この航路は筑紫の大津を立ち、屋久、奄美、沖縄、石垣などの島々を島伝いに南下した後、西に向かって、中国の東海を渡り、揚子江の入り江一帯まで直行するもので、航行に要する日数としては北路とほぼ同じだが、遭難する危険性は遥かに高かった。第十次の遣唐使船以後の多くは五島列島から直接横断する南路に変わった[9]。天平五年時の航路は南島路で、難波津から中国の蘇州まで約四ヶ月かけて着いている。遣唐使に贈る歌において行路の安全がまず詠まれたのも当然のことであったろう。そこから長安まで八ヶ月かかっている計算になるが、実際には上京の人数などの中国側との交渉の時間も含んでいる。交渉後、その多くが上陸地で待機することになり、上京の人数は制限された。入唐大使・副使・判官・録事[10]といった役人と留学生・留学僧等が都に趣

いたらしく、東野治之氏は遣唐使として都を見たのは「せいぜい全体の一割ぐらい」[11]と推測されている。唐国内で蘇州から長安までの道のりは約五百キロ、日本国内の縦断よりも遥か遠くである。大部分の乗組員はいわゆる現地組となり、寺院を参拝したり、市場で交易したりしたらしい。

こうした遣唐使一行の旅の軌跡に対して当該歌が「宿りせむ野」を詠むことは、それが蘇州から長安までの道のりの野であった可能性を考えさせる。歌の作者が誰の親母（生母の意）であるのか、当事者の名は不明であり、詳細はわからない。少なくとも現地組ではなかったであろう。そこに、母の心配が、航路もさることながら、冬の大陸の旅に向けられた理由が推測できる。後の寛平六年九月十四日、菅原道真が遣唐使廃止を求めた「請レ令三諸公卿議二定遣唐使進止一状」には「度々使等、或有二渡レ海不レ堪レ命者一、或有二遭レ賊遂亡一レ身者一。唯未レ見三至レ唐有二難阻飢寒之悲一」とあって、遣唐使廃止の理由の一つに唐国内での安全性の問題が挙げられている。このことはそれまでの遣唐使において、航路の安全は保障されないものの、唐に到着すれば安全が保障されていたことを示している。[12]しかし、母にとってそこは見知らぬ異国の地であり、当該歌の反歌が「宿りせむ野」の寒さを案じていることが思い起こされる。

三　客人

長歌の内容は「秋萩を妻問う鹿」から詠み起こし、「我が一人子」である事が強調されている。その表現が遣唐使船進発の夏四月とずれる事については、「むしろ遣唐使一行とその家族全体の側に寄った表現」と解する説を前に挙げたが、遣唐使の決定が前年の初秋であることは、当該歌の作者である母親の心配がその時点から始まっていることを考えさせる。

長歌において、前半部分はこの一人子が「草枕　たびにし行けば」の条件句を構成し、後半部分はそのための「斎ひ」の儀礼を具体的に叙述して「ま幸くありこそ」と結んでいる。長歌の骨子は「一人子が…たびにし行けば…ま幸くありこそ」である。「一人子」の目的「草枕　たびにし行けば」の「たび」を本文では「客」の字で記載し、反歌の「たびびと」も「客人」と記載する。それを「ま幸く（本文　真好去）ありこそ」と願うのである。「客」の字は『説文解字』に「客　寄也」とあり、大広益会『玉篇』に「客　賓也」とも ある。『後漢書』（馬援伝）に「詔二武威太守一、令三悉還二金城客民一。帰者三千余口」に「金城客人在二武威一者」と注されていて、「客民」と同義で寄留の民の意と解される。「客（たび）にし行けば」には見知らぬ他国に「一人子」が行く事への不安を読み取ることが可能であろう。そこへの願いが「我が思ふ我が子」と「我が」が繰り返されて子への執着を示し「ま幸くありこそ」という強い表現へと導かれている。ちなみに遣唐使人はその能力はもちろんであろうが、容姿の良い者が選ばれたという。[13]その子への「ま幸くありこそ」の表現を検討しておきたい。

柿本朝臣人麻呂家歌集歌曰

葦原の　瑞穂の国は　神ながら　言挙げせぬ国　然れども　言挙げぞ我がする　言幸く　真福（まさきく）ませと　つつみなく　幸くいまさば　荒磯波　ありても見むと　百重波　千重波にしき　言挙げす我は　言挙げす我は

反歌　（巻十三・三二五三）

磯城島の大和の国は言霊の助くる国ぞ真福ありこそ
（巻十三・三二五四）

人麻呂歌集にあるとする題詞を持つ右の歌は、「相聞」の部に収められているが内容的には「遣外使節や地方官として遠く旅立つ友人などに贈った歌か」（新編古典全集『萬葉集』）と推測される。元暦校本・天治本・類聚古集では長歌末尾「言挙げす我は」が小文字で繰り返されていて、別れの宴席などで口誦されたことも考えられる。「言挙げ」をしないことが神意（神ながら）の国でありながら、「言挙げ」をすることに呪的な要素を示唆して、「言霊」の霊力を歌いあげている。反歌末尾の語句を共通にする三二五四番歌には、右の人麻呂歌集歌の影響を推測でき、帰還への願望がそこに籠もると考えられる。集中には「ま幸く」の語が次のように見える

①岩代の浜松が枝を引き結び真幸あらばまたかへり見む
（巻二・一四一）

②我が命し真幸あらばまたも見む志賀の大津に寄する白波
（巻三・二八八）

③片手には　木綿取り持ち　片手には　和たへ奉り　平けく
間幸ませと　天地の　神を乞ひのみ　いかにあらむ　年月日に
か　つつじ花…
（3・四四三）

④好去てまたかへり見むますらをの手に巻き持てる鞆の浦回を
（巻七・一一八三）

⑤命をし麻勢久もがも名欲山石踏み平しまたまたも来む
（巻九・一七七九）

⑥真幸くて妹が斎はば沖つ波千重に立つとも障りあらめやも
（巻十五・三五八三）

⑦あをによし　奈良山過ぎて　泉川　清き川原に　馬留め　別れし時に　好去て　我帰り来む　平らけく　斎ひて待てと　語らひて　来し日の極み…
（巻十七・三九五七）

⑧麻佐吉久と言ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも
（巻十七・三九五八）

⑨礪波山　手向の神に　幣奉り　我が乞ひのまく　はしけやし
君がただかを　麻佐吉久も　ありたもとほり　月立たば　時も
かはさず　なでしこが　花の盛りに　相見しめとそ
（巻十七・四〇〇八）

⑩夕潮に　梶引き折り　率ひて　漕ぎ行く君は　波の間を　い行きさぐくみ　麻佐吉久も　早く至りて　大君の　命のまにま
ますらをの　心を持ちて…
（巻二十・四三二一）

⑪たらちねの　母掻き撫で　若草の　妻取り付き　平けく　我は斎はむ　好去て　はや帰り来と　ま袖もち　涙を拭ひ　むせひつつ　言問ひすれば…
（巻二十・四三九八）

①は有間皇子の自傷歌。謀反の罪で護送される途中の作で、生きて再び岩代の地を踏む事を祈る歌である。②は穂積朝臣老が佐渡に流される時の作で、流刑地での死の不安を抱えた表現。③は摂津国班田史生丈部龍麻呂が自経死した時に大伴三中が詠んだ作。①から③には「ま幸く」と望む事が実は「死」をも予感させる困難さの中での強い帰還への願いとしてあることを窺わせる。④は羈旅の部にあり、⑤は藤井蓮が遷任されて上京する時の作であり、いずれも「ま幸く」あることがその地との再会に繋がっている。「ま幸くありこそ」と歌うことは幸いである事を願うだけでなく、そう歌うこと自体に帰還への強い願望が込められていると謂える。⑥以下は当該歌

以降の作であるが、その用法は共通すると思われる。即ち、⑥は遣新羅使の歌。⑦⑧は家持の「哀二傷長逝之弟一歌一首」で、越中に旅立つ家持に対して、今は亡き弟が無事の帰還を願ってくれた事を嘆き、⑨は池主が家持に贈った歌で生別の悲しさを詠む。⑩⑪は防人の悲別の心を詠む家持の作である。

「ま幸く」と願う事は「無事の帰還」を強く意味し、しかし、それが叶わないことへの危惧を含んだ表現ということができるであろう。「ま幸くありこそ」と願う「斎ひ」は旅の行程における幸いによって無事に帰還する事を対象としよう。そこに遣唐使に贈る他の歌々との類似性がある。「真好去」と「好去好来歌」と同じ用字を当てていることは、憶良の用字を学ぶ[14]と共に「好去好来歌」の航路の安全と早い帰還への願いを重ねていると考えられる。

四　羽裳

反歌において作者は、結句「天の鶴群」に旅人を霜から守る存在として「我が子はぐくめ」と命令形で呼びかけ、体言止めで詠嘆を込める。鳥が子をはぐくむという発想については、早く『代匠記』が「詩生民之什曰。誕寘二之寒氷一、鳥覆翼之。鳥乃去矣、后稷呱矣。注、覆蓋翼籍也。以二一翼一覆レ之、以二一翼一籍レ之也。此ハマサシク鳥ノ人ヲハククメル證ナリ」と周の祖后稷誕生時の逸話を詠じる『毛詩』の例を挙げて、漢籍との発想の類似を説き、井上通泰は『毛詩』を基にした『史記』周本紀の例「遷レ之而弃二渠中冰上一、飛鳥以二其翼一覆二薦之一」を引き、「かような名歌が素養の無い人によまれようとは思はれぬ」としてその親母が無名の人ではなかったと推測する[15]。漢籍の影響を見ることは新日本古典文学大系『萬葉集』も踏襲するところで、通泰の説を引いた上で、鶴は親子の情を知る鳥と考えられていた事を「『鳴鶴陰に在りて、その子これに和す』（易経・繫辞伝上）など」として「鶴は母親に代って子を守る鳥たるにふさわしい」とする。発想の類似は否めないと思われるが、注釈を始め、諸注釈書はそれを必ずしも踏襲していない。両者について検討してみたい。

『詩経』（生民）は、未だ襁にくるまれた后稷を寒氷の上に捨てたのを鳥が「覆翼」したという内容で、卵生型の始祖神話と共通点が多いとされる[16]。しかし始祖神話と当該歌ではその細部において文字の使用などに相違が見られる。一つには『毛詩』『史記』では「覆翼」とあるのに対して『萬葉集』では「羽裳」とある点、一つには毛伝が「大鳥来」に続けて「以二一翼一覆レ之、以二一翼一籍レ之也」とし、鳥が一羽であるのに対して『萬葉集』では「鶴群」とある点、また、寒氷に棄てられた后稷に対して「霜降らば」と視点の位地にずれを指摘できる点である。

「覆翼」の「覆」は『説文解字』に「覆、覈也。从襾復声。一曰、蓋也」とあって、本来くつがえる意と推測され、『釈名』（釈言語）には「覆、孚也。如二孚甲之在二物外一也」とする。「孚甲」は種子のうわ皮、籾殻の意。ただし『説文』には「孚、卵即孚也」とあって、「孚」は卵のかえる意を持つことがわかる。また、大広益会『玉篇』に「孚六切。反覆也。又敷救也。蓋也」とあって、「くつがえる」意から「おおう」意となっていることがわかる。『新撰字鏡』享和本にも「掩、一感反。加戸志於保不」とある。「鳥覆翼之」とある事には卵生型の始祖神話への類感があろう。ただし、『萬葉集』において、「覆」の字は「玉匣覆（おほふ）をやすみあけて去なば」（巻一・九三）

のように匣の蓋がおおっている状況、「常闇に　覆たまひて」（巻二・一九九）「横風の　にふかに　覆きぬれば」（巻5・九〇四）「秋山に　霜降り覆　木の葉散り」（巻十・二二四三）「笹の葉にはだれ降り覆消なばかも」（巻十・二三三七）「吉隠の野木に降り覆白雪の」（巻十・二三三九）のようにその空間全体を対象とする場合の「おおふ」意に用いられている。一方『萬葉集』が「はぐくめ」とする本文「羽裳」の「裳」の字は『説文解字』には「裹　纏也」とし、大広益会『玉編』には「裹、苞也」とあり、また『新撰字鏡』には「裹裳、正古禍反上、借古臥反去、苞也、纏也」、とあり、『類聚名義抄』（観智院本）には「裹　ツヽム、ク、モル」とあって、「つつむ」意と考えられる。『萬葉集』に

梅の花降り覆雪を裳持ち君に見せむと取れば消につつ
（巻十・一八三三）

とあるのは「覆」と「裳」との相違を明らかにする。「覆」は梅のある一帯が雪に降られて梅の花が紛れて見えない状態である。そこには梅全体をおおう雪が降り、雪と梅とが視覚的には分かち難くなっている。その雪を梅の花ごとつつんで持つが、持つことで雪は溶けて消えてしまい、掌には雪で見えなかった、つつまれていた雪ならぬ梅の花が顕在化するという意である。[17] この「羽裳」は遣新羅使人歌群の冒頭に二首「羽ぐくむとして見える」

武庫の浦の入江の渚鳥羽具久毛流君を離れて恋に死ぬべし
（巻十五・三五七八）

大船に妹乗るものにあらませば羽具久美持ちてゆかましものを
（巻十五・三五七九）

右の二首が示すように、「羽ぐくむ」には羽で抱くように包む意があると考えられる。『萬葉集』が「覆」ではなく「裳」を用いた意図がそこにはあると推測される。

五　天の鶴群

「天」を冠した「鶴」は集中孤例であり、かつ「鶴」を「鶴群」とするのも当該歌の例が唯一である。集中、「天（アメ）の」と冠する対象は「時雨」「露霜」「白雲」といった天象、「川原」「み空」「海」といった自然、「御門」「御陰」といった「宮殿」に関するものと「火」とであり、生物に冠する例は見られない。「天の鶴群」の語が特異な用法であることが知られる。しかも「天の」を冠する「時雨」「露霜」「川原」「み空」には枕詞「ひさかたの」を冠する例が見え、しかもその表記は仮名表記を持つ八二二番歌を除いていずれも「久堅乃（能）」[18] とある。「久方」「久堅」の表記について『時代別国語大辞典上代編』は「天や天の物が久遠の彼方にあり、永久に確かなものだから、という付会的な解釈によるのであろう」と推測する。「天の」を冠する語句が神代記に多く見え、「沼矛」に始まり「眞拆」などの道具類、「浮橋」「御柱」などの建築物、「眞名井」「香山」などの自然、神の食事に関する「御饗」「眞魚咋」、「八重多那雲」の天象の他に、「斑馬」「服織女」など、高天原で事象全般に亘って、冠せられていることと無縁ではあるまい。もちろん、神代記において高天原の事象に対して冠せられている用法と『萬葉集』のそれとが同質であるとは考えにくい。ただし、多く枕詞「久堅の」を冠しても用いられる「天の」の用法からも、空よりも遥か遠い霊妙な空間を想像していたであろう事は推測される。「天の鶴群」も単に空高く飛んでいるという意味では無いであろう。空の遥かなる

上方に天があり、そこに属する霊妙な鳥故の把握が「我が子はぐくめ」を発想させるのであろうし、そこに具体的には「鶴群」の姿の見えないことを考えさせる。「鶴」は群れをなして飛ぶ鳥であり、「鶴さはに鳴く」（巻三・二七三、三八九、巻十七・四〇一八）はそうした生態の反映と推測されるが、「鶴群」という「群」では捉えられていない。

早く「鶴」を歌うのは軽太子の謀反に関わる允恭記の次の歌である。

かれ、その軽太子をば伊予の湯に流しまつりき。また流されたまはむとせし時に、歌ひたまひしく

天飛ぶ　鳥も使ひそ　鶴が音の　聞こえむ時は　我が名問はさね　（記　八五）

右の歌では、「鶴」の鳴き声への興味とその鶴が「天飛ぶ」と捉えられていることが注意される。「鶴」の鳴き声は鋭く、非常に遠くまで聞こえるとされる。右の記歌謡でも「鶴が音の　聞こえむ時は」とその姿よりもその声に注意が向いており、「天飛ぶ」とされる「鶴」の姿は空の遥か遠くにあって、視界に入っていなくてもよい。集中の「鶴」はその姿よりもその鳴き声を詠まれる事が多く、そうした「鶴」が「使ひ」として把握される事はそこに「鶴」の霊妙さを感じとっていたことを推測させる。[19]「天の鶴群」には「鶴」を「我が一人子」の許へ行くものとする把握が前提としてあり、その飛翔に望みを託すという発想には共通性が窺える。ただし、記歌謡と当該歌が同じ位相に位置しているとは考えにくい。「天」と「鶴」との結びつきには共通性が窺えるが、「鶴が音の…我が名問はさね」は音声を介する一義的行為を表明するのに対して、「霜降らば　…我が子はぐくめ」には介されるべき音声の段階は省かれて「鶴」の姿から羽で裹む行為、さらにその温かさへとその示唆される内容が二義的な把握へと段階が進んでいるからである。

霜の寒さとの関係で鳥を詠む作がある。

葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ　（巻一・六四）

埼玉の小埼の沼に鴨そ翼霧る己が尾に降り置ける霜を払ふとにあらし　（巻九・一七四四）

天飛ぶや　雁の翼の　覆ひ羽の　いづく漏りてか　霜の降りけむ　（巻十・二二三八）

明け来れば　沖になづさふ　鴨すらも　妻とたぐひて　我が尾には　霜な降りそと　白たへの　翼さし交へて　打ち払ひ　さ寝とふものを…　（巻十五・三六二五）

いずれも鴨や雁の羽においた霜を詠む作だが、鴨や雁の茶色の羽が白く変わる様は一層の寒さを感じさせたと思われる。「鶴」の白さでは霜が可視化する寒さは目立たない。が、右の四首の中で、二二三八番歌は「天飛ぶや」とあって、地上に降っている霜はその「覆ひ羽」から漏れたとする発想には、天飛ぶ雁の翼の広がりが思われる。「天の鶴群」に対して「覆」ではなく、「羽裹」とある意図がさらにはっきりしよう。

天平五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈二入唐使一歌一首

玉だすき　かけぬ時なく　息の緒に　我が思ふ君は　うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　夕されば　鶴がつま呼ぶ　難波潟　三津の崎より　大舟に　ま梶しじ貫き　白波の　高き荒海を　島伝ひ　い別れ行かば　留まれる　我は幣引き　斎

ひつつ　君をば遣らむ　はや帰りませ　（巻八・一四五三）

同じ第十次の遣唐使に贈る歌で、金村は三津の景として「鶴」を詠んでいる。「鶴」は渡りが遅い時には三月二十日頃まで日本にいるとされる。[20] 遣唐使の一行が出立の準備を進めている段階で「鶴」が群れをなして中国方面へ向かう、その景を目にしたことが考えられる。

（冒頭省略）うつせみの　世の人なれば　大君の　命恐み　天ざかる　鄙治めにと　朝鳥の　朝立ちしつつ　群鳥の　群立ち去なば　留まり居て　我は恋ひむな　見ず久ならば

（巻九・一七八五）

「神亀五年戊辰秋八月歌一首」の題詞を持つ右の歌は、「笠金村之歌中出」とあり、越前に下る石上乙麻呂の家族に代わってその心を詠んだとされる。「群鳥の　群立ち去なば」は、旅立ちの際の賑やかさと後の残された者の寂寥とを対比させる表現であり、遣唐使の一行が去る状況に匹敵しよう。「鶴」を群れとして詠む当該歌の「天の鶴群」の体言止めにはそうした別れの状況の反映を考え得るのではないか。

阿倍朝臣老人遣レ唐時奉レ母悲レ別歌一首

天雲のそきへの極み我が思へる君に別れむ日近くなりぬ

（巻十九・四二四七）

右の歌は子の立場からの作で、当該一七九〇・一七九一番歌に対する答歌と見る説もある。遣唐使として旅立つ遠さが「天雲のそきへの極み」として把握されているのは行く者にとっても見送る者にとっても共通理解であった。その遣唐使進発の時の歌として「我が一人子」の航路の無事を強く言挙げし、唐国内においても遙かな道のりを旅する「我が一人子」を思いやる当該歌を、『萬葉集』が「遣唐使の母が贈る歌」として記載してあることに無理は無いと思われる。

注

(1) 森克己氏『遣唐使』至文堂　昭和三〇、茂在寅男・西嶋定生・田中健夫・石井正敏氏『遣唐使研究と史料』東海大学出版会　昭和六二年など

(2) 佐藤高明氏は古今和歌集の『離別歌』との共通性に触れ、そこに「和歌の世界では『離別』の場合、『見送る人』が主となって詠む伝統が、万葉より古今の流れの中にすでにこのとき芽生えつつあったのであろうか」とされているが、今は触れない。「『万葉集』の遣唐使の和歌―山上憶良の場合―」徳島文理大学『文学論叢』第一四号平成九年三月

(3) 梶川信行氏『万葉史の論　笠金村』桜楓社　昭和六二年

(4) 川北靖之氏「遣唐使と神祇祭祀」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第二号平成九年三月

(5) 前掲注(4)論文

(6) 前掲注(3)書

(7) 鈴木利一氏「遣唐使に贈る歌―巻九、一七九〇、一七九一について―」『大谷女子大国文』第二八号　平成一〇年三月

(8) 『扶桑略記』は「七月庚午日…遣唐大使丹治比廣成・副使中臣名代、乗船四艘、惣五百九十四人渡海。沙門栄叡普昭法師等随レ使入唐」と伝える。

(9) 前掲注(1)書、及び毛昭晰『遣唐使時代における五島列島と明州の関係』『アジア遊学』第四号平成一一・五

(10) 遣唐使の構成については『延喜式』（巻三十大蔵）に使節の他に「知乗船事　訳語　請益生　主神　医師　陰陽師　画師　史生　射手　船師　音声長　新羅・奄美等訳語　卜部　留学生　学問僧　傔従　雑使　音声生　玉生　鍛生　鋳生　細工生　船匠　柂師　傔人　挟杪　還学僧

水手長　水手」とあって、使節を助ける職員、船の管理に関係する者、留学者・技能者など多様な職掌が含まれている。東野治之氏『遣唐使船東アジアの中で』（朝日選書　平成一一年）参照。

(11) 前掲注(10)東野治之氏著、

(12) 石井正敏氏「寛平六年の遣唐使計画と新羅の海賊」『アジア遊学』第二六号平成一三年四月）

(13) 注1森克己氏前掲書、王勇氏「遣唐使人の容姿」『アジア遊学』第四号　平成一一・五

(14) 前掲注(7)の論文

(15) 『萬葉集雑攷』明治書院　昭和七

(16) 藤堂明保監修・加納喜光訳　中国の古典19『詩経　下』学習研究社　昭和五八

(17) 拙著『萬葉歌の主題と意匠』塙書房　平成一〇

(18) 「久堅の天の」は「時雨」（巻一・八二）「川原」（巻三・四二〇）「露霜」（巻四・六五一）「み空」（巻五・八九四、巻十二・三〇〇四）に見える。

(19) 東光治『続萬葉動物考』人文書院　昭和一九、拙稿「『鶴が音』考」『萬葉集研究　第二十六集』塙書房　平成一六

(20) 大後美保氏『季節の事典』東京堂出版　昭和三六